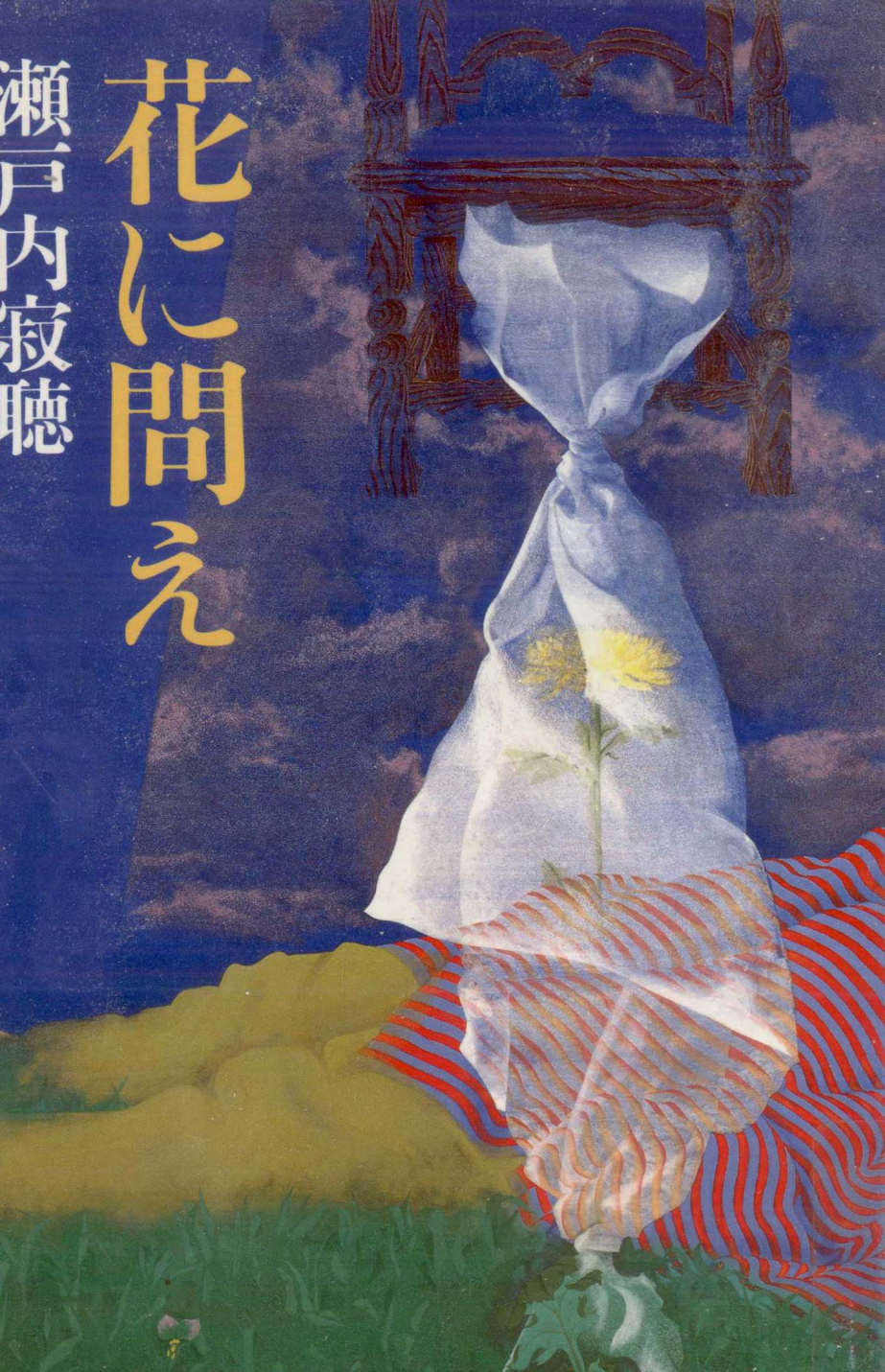


瀬戸内寂聴

花に問え



瀬戸内寂聴

花に問え

花に問え

©一九九二 検印廃止

一九九二年 六月 一五 日初版印刷

一九九二年 六月 二五 日初版発行

著 者 瀬戸内寂聴

発行者 嶋中 鵬二

印刷所 三晃印刷

製本所 小泉製本

発行所 中央公論社

〒100 東京都中央区京橋二一八―七

振替 東京二一三四

花に問え

もしかしたら、その出逢いは新緑のせいだったかもしれない。

五月の四国路はどこまで行っても新緑の洪水だった。

フロントグラスに襲いかかるような緑の炎の中を駆け抜けていると、まぶしさに目の底までまっ青に染めあげられそうに思う。

やっぱり引き返して、日和佐のドライブインのテーブルに置き忘れたサングラスを取ってくるべきだった、と逡巡した時、車は白い橋にさしかかっていた。

河口に近い橋は長く、左の方に海がきらめいていた。橋の下は白い砂が広がっている。ありふれた低めのコンクリートの手摺が橋の両側にのびていた。

男はその橋の中程に立っていた。手摺に寄りかかり、半身を乗りだすようにして川面を覗きこんでいる。僧形の巡礼はこの地方では珍しくもない。それでも思わず男の姿がわたしの目に

異様に映ったのは、その僧のいでたちがあまりに時代めいていたからだ。墨染の法衣の上に朽葉色のシーツのような袈裟を右肩をだして斜めに大げさにまとっている。その上、肩には昔風の笈までもものしく背負っていた。手甲、脚絆もつけ、それは絵で見る弘法大師の巡礼姿そのままだった。足許に饅頭形の菅笠が伏せてある。その装束のすべてが長旅に汚れ、ぼろぼろに萎え疲れている。

わたしは乗り古したBMWのスピードをサングラスにこだわっていくらか落していたのだろうか。嘔吐しているのかと見えるほど、うつむいている男の横顔をすっかり目に焼きつけていた。伏目になった横顔の線が、どきっとするほど亮介に似ていた。

そのまま橋を渡りきり、二百メートルも行きすぎてから、ふいに道を引きかえし、橋へ戻っていったのは、どういうつもりだったのか、サングラスを取りに戻るのも億劫がったのに。

男の背に向って声をかけようとして、わたしは男が南へ行くのか、北へ向うのかわからないことに気がついたのだ。

「お坊さん」

運転席の窓から呼びかけると、男はゆっくり振り向いた。陽灼けした顔に髭が濃くのびていた。頬がこけ、瞼がくぼんでいる。垢じみているが不潔な感じではない。そういう顔立だった。亮介の死顔がその顔につと重った。やはり似ていた。顔の造作というより、顔の雰囲気似ていると思った。

仕事に根をつめだすと、亮介は髭も剃らなくなる。どれほど不精髭がのびても亮介は涼しうな顔に見えた。

「高知の方へお行きはるんやったらお乗りやす」

まともに見ると、男の衣も袈裟も無惨なほど埃にまみれていた。脚絆も汚れていたがわたしはその足元を見てふっと笑ってしまった。脚絆の下は鼠色になったスニーカーだったのだ。さすがに草鞋ではほとんどアスファルトになった巡礼路は歩けなくなっているのだろう。わたしの笑った意味を察したのか、男も口元をゆるめた。鮮やかな皓い歯がのぞき、男の若さがふいに際立った。

「ありがとうございます。修行の遍路ですから……」

「わかってます。そやからお接待しようというてるんです」

男はまだためらっていたが、見つめているわたしの目に負けたように目を伏せると、

「お言葉に甘えてお接待頂戴させていただきます」

と、殊更らしく挨拶して車の後ろを廻り、わたしの右に乗りこんできた。笈と笠は後ろのシートに置いたが、朱塗りの錫杖は入るかと思った時、男は長い錫杖を三つにした。三味線の棹のように錫杖は差しこみになっていた。あっけにとられてわたしはまた声を出さず笑った。折られる時錫杖はしゃらしゃらと賑やかな音をたてた。

「ずっと歩いてお遍路しとおいやすの」

「はい、伊予と高知の境の山の奥に居りますから、逆打ちで讃岐、阿波と廻って来ました」

「お偉いわね、もう何日くらい歩かれましたの」

「今日で三十一日めです。途中で三日ほど高熱でへたりましたから」

「へえ、そら御苦労さんね、そんな時はへんろ宿に泊らはりますの」

「いや、病人は宿でもきられますから、札所の大師堂の中に夜だけでもぐりこんで、昼間は林の中にかくれてました」

「若いから出来るのね、一日にどれくらい歩かはりますの」

「はじめは三十キロでしたが、この頃は四十キロです」

「ヒッチハイクはしたらあきませんか」

「修行ですから……時々、今日みたいに誘って下さることもあります……」

「お遍路さんはお接待はなんぼでも受けてよろしいのんとちゃいます？」

「食物や宿なら……昔だったら、こういうのは馬か駕籠に乗せてもらうことですか、考えられませんか」

道は海に近くなり左手に濃い紺碧の海が輝き渡っている。男の声は風貌の厳しさに似ず、若く甘かった。自分から風早智信と名乗った。

「ちしん？ 一遍さんと同じ智真どすか」

わたしが訊きかえしたら智信は愕いた声で、

「お宅は時宗ですか」

と問いかえした。

「いいえ、うちは真宗ですけど、ちょっと、ひょんなことから一遍さんと御縁が生じまして」と答えながら、何もこんな行きずりの僧に正直な話をすることもあるまいと思った。

「ぼくのはしんが信です。智は一遍上人と同じ智です。でも愕いたなあ、ちしんといったらすぐ、一遍上人が浮ぶのは、よっぽど御縁があるんですね」

男は無意識に袂から煙草を取りだしていた。

わたしは車についているライターの場所を教えた。

「すみません、喫ってもいいですか」

智信は、あわてて挨拶した。火をつけ窓をすかせると、目を細めさもうまそうに煙草を吸った。

バックミラーに智信の表情が映っている。高い鼻と、切長の大きな目と鋭い顎の線が「一遍聖絵」の中の一遍に似ていなくもない。そしてその容貌は、亮介にも通じていた。

「あんまり一遍さんに熱中するもんやから顔付まで似てきったんとちがいますか」

わたしがうつむきこんで「聖絵」に見惚れている亮介の横顔にいった時、亮介は笑いもせずつぶやいた。

「昔の旅は苛酷だったんだなあ、聖絵の中で、一遍がみるみる老けていつてる。ほらこの一遍

なんかまだ四十二歳なのに、六十くらいに見えるじゃないか」

亮介の肩ごしに覗きこむと、一遍が祖父の河野通信の墓の前で回向している図があった。北上の江刺にその墓はあった。大きな土饅頭のまわりには一遍の他に僧や尼僧が一緒に十余人ひざまずいて拝んでいる。土饅頭の向う側にも人がいるとして二十人ばかり帰依者が一遍に従っていたと見える。背をまるめ、土に坐って祈禱している一遍の姿は、たしかに若々しいとはいえない。

亮介はその頃終日でも「一遍聖絵」に見飽きなかった。一遍上人の生涯を描いた国宝「一遍聖絵」は、亮介といっしょにわたしも奈良の博物館で見せてもらったことがある。その時の感動は今も忘れられない。そういうことが許されたのは、亮介が、修復師として、国宝の絵巻物や古文書の修復を手がけて、一応その道では上手の名が通っていたからであった。

どういう話合いだったのか、その日は博物館が開くのを待ちかねて訪ねていった。館内の階上の奥まった部屋に勝手知った様子で真直ぐ進む亮介の背後から、わたしは黙って尾いていった。廊下の途中で、どこからか現れた中年の男が亮介に会釈して、腰の鍵束をじゃらつかせて、一つの扉を開けた。部屋の中は周囲に棚が設けられていて、旧いのや新しいのや様々な形の大小の桐箱が載せてある。

男はその箱の中から迷わず一つの細長い箱を取り出し、部屋の中央の白木の台の上に置いた。「では、おすみになりましたら、呼んで下さい」

丁寧だが事務的な言葉づかいで亮介にいい、なぜか黄八丈に更紗の帯をしめたわたしの方には一瞥もくれず出て行った。

亮介が箱の蓋を取り、中から白絹に包んだ巻物を取りだした。

目顔で自分の隣に來いという。わたしは唾をのみこむような気持で、亮介の傍にすりよっていった。もうさんざん聞かされている「聖絵」の値打やその素晴らしさは頭の中に叩きこまれている。写真ではその何場面かは目にしてもらいた。

亮介が紙のマスクをつけた。わたしにも一つ手渡した。昨夜新しくわたしが作ったものだった。

巻物が亮介の細い長い指で展げられた。

そこに現れた絵巻物の色調の柔かさとやさしさにわたしは息を呑んだ。

建長三年（一二五二）春、十三歳の一遍智真が、伊予の生家をはなれ、はるかな筑紫の太宰府へ聖達に弟子入りするため出立する場面が描かれている。若々しい智真の姿の旅立のすがすがしさもさることながら、霞が立つ伊予の生家の周辺の駘蕩とした春の風景の匂やかさにまず目が洗われた。

山も野も道も、空も、春霞と春風になぶられ、うっとりともどろんでいるように見える。花盛りの桜の花さえ清楚で、白い衣の女神がそこにたちあらわれた幻のように見える。草も、野の花も、その匂いが漂ってくるような瑞々しさだった。絵具のせいか保存のせい、それは昨

夜描いた亮介の絵のような新鮮さだった。

十三歳の智真の求法の旅に始まって、正応二年（一二八九）八月、五十一歳で兵庫の観音堂で入滅するまでの生涯を、絵と詞書ことばがきで詳細にたどっていた。

亮介から折にふれ聞かされ、その傾倒ぶりから、「聖絵」についての予備知識は相当与えられていた筈だったが、本物のすばらしさは、予想や予測をはるかに上廻っていた。

わたしは巻物が少しずつ展かれていく度、その中から風の匂いや、雨のしめりにうたれる草木の息づかいまで聞かされた。

憑かれたように魅入られている亮介の邪魔をすまいと、体の位置や自分の視線まで気遣うので、たちまち疲れて背骨が痛くなってきた。しりぞいて、マスクを外していると、亮介がちらと振りむき、目だけでくたびれたかと微笑し、すぐまた「聖絵」に視線を戻していく。

壁際かきの木の椅子に腰を下し、わたしはしばらく、ぼんやり亮介の後姿を見ていた。着馴らした紺結城の筒袖の着物に、これも共地の結城でつくったたつけ袴を穿いた亮介は、それがトレードマークになってしまった服装がびったり軀に馴染み、一種の風格をつくっていた。オールバックにした長髪は、白いものがまじり、それも多すぎる頭髮の量をなだめているように見え、わたしには好ましかった。

母の喜和が死ぬまで、亮介の白髪はまだなかったのではないだろうか。

昼さがりのとろりとした晩春の空気の中で、縁側の椅子に亮介を坐らせ、母が鉢と櫛を器用

に扱いながら、亮介の髪を刈り揃えていた光景が思い出されてくる。

亮介は頭を母に預けきつて、自分は膝にひろげた新聞を目で追っていた。時々、細い指がのび青い切子のギヤマンに盛った枇杷を探り、手さぐりで皮をむいては口に運んでいる。八歳くらいだったわたしは膝をついたままにじりより、枇杷を一粒つまむと、きれいに皮をむいて亮介の指に渡してやった。母がわたしの顔も見ず、

「近うよったら、髪のお毛が**けえ**が目々に入るえ、あっちいいて、お里はんにおやつもろておいやす」という。

「ほんまに女のお毛より仰山あるんやから」

後のことばはひとりごとのように聞えた。覚えているつもりもなかったそんな場面がいやに鮮明に浮んできて、わたしは戸惑った。

亮介がわたしの部屋を夜なかにノックしたのは、あの晩だった。母が死んでからわたしは母の部屋を改装してさっぱりした洋間にし、ベッドを入れ、自分の寝室にしていた。

「眠れないんだ。『聖絵』の毒氣に当たったのかもしれない」

亮介は片掌にブランドーのボトルをさげていた。

わたしは黙って亮介を部屋に入れた。荒いチェックのガウンを着た亮介はたっつけ袴の姿より若々しく見えた。すれちがう時、もう酒の匂いがしていた。

話らしい話もせずわたしたちは結ばれた。わたしの流した血を見て亮介はやや青ざめた。

「悪かった……知らなかった」

下手な言い訳だとわたしは笑った。

亮介は四十四、わたしが二十七の時だった。母が子宮癌で死んでから、二年経っていた。

母の旅館「花菱」の離れに亮介が飼われてから十五年めに、母が死んだのだった。母の五十九の秋だった。

「前からBMWに憧れてたんです。運転させてくれませんか」

智信にいわれてわたしはうなずいた。車はまだ海沿いの明るい白い道を走っていた。

車をとめ、外に出ると、潮の香が空気を濃く染めていた。わたしが両手をあげ深呼吸している間に智信は袈裟を脱ぎ、衣の袖をたくしあげ首の後ろで結びあわすと、いそいそと運転席に廻っていた。

橋の上で見た疲れきった様子が消え、いきいきして若く見えた。

わたしは智信のぬくもりの残った席に坐りながら、智信の運転を横目で見守った。すべりだしたとたん、その運転の確さに安堵した。

「お接待が反対になってしまったわ」

わたしの声も浮き浮きしていた。

年を訊くと二十七という。亮介はこんな若さで、母に飼われてしまったのかと、ふいに胸が

波立ってくる。

「いつから坊さんにならったの」

「三年前に得度しました。それでも本気になったのは去年あたりからです」

「お宅、お寺さんやないんですか」

「ええ、父親は官吏で母は中学校の教師です」

智信は車のスピード感到に全身をゆだね、快適そうな表情になり、わたしとの会話も面倒臭そうに見えた。

しばらくふたりとも黙って走りつづけていた。

「ブルーのペンツは持たれたことないですか」

智信が前を向いたままいう。

「ペンツは好きやないの」

「ぼくはペンツには芳しくない想い出があるんです。ブルーのペンツでした」

「事故？」

「いえ……盗んで……とっ捕ったんです」

「ひゃあ、いつ」

わたしは卵でも盗んだようにいう智信の話しぶりに興味を誘われた。

「大学の最後の年です。春の連休で空港にアルバイトに行ってたんです。うちは千里なもんで、

伊丹の空港へアルバイトによくいったんです。車の番をしたり、ちょっとした清掃やったり、仕事の割にベイがわりかしいんですよ。その日も駐車場の整理に雇われていて、見廻っていたら、青いベンツに鍵がかかってなくて、運転手がいらないんです。ちょっと窓を押してみたら、そこもずっとあくんですよ。こんな不意な奴、どこのどいつやと思った時、ちょっと乗ってみたくなったんです。運転席のハンドルの横に、駐車場のチケットまで乗っかってるんですよ。それでつい、ふらふらと、空港の外へ走り出してしまったんです。ベンツなんて生れてはじめて乗るし、爽快この上なしです。それで、電話でその頃つきあった女の子呼びだして、神戸までドライブしてしまいました。彼女はキャアキャア喜ぶし、鍵もかけない間抜け野郎の顔が見たい位で、すっかりルンルンでした。

夜の神戸知ってますか。最高ですよ。六甲に登ってふっ飛ばして、金はないので、ラーメンやたこ焼で腹ごしらえをして、ついでに明石まで走って帰りました。こんないい車でカーセックスもしなきゃ損だって、女の子がいうんです。十七だけど成熟してるんですよ。暴走族を卒業したばかりの頃でした。ぼくはバイクは高校の時二年くらいでやめました。いっしょに走ってた友達が目の前で首の骨折って即死したの見て嫌気がさしたんです」

智信のしゃべり方は淡々として、さり気ないので、車泥棒も、友人の死も、他人のことを話しているように聞える。

「その車どないしはったの」